

世界を制作=認識する：ブルーノ・ラトゥール×アルフレッド・ジェル

久保 明教

【DRAFT ONLY】

：春日直樹編『現実批判の人類学』（世界思想社）収録論文草稿。引用・転載NG

一. はじめに

人々にとって自明な現実とはいかにして生み出されるか。この問いに対する人類学的解答は長らく文化主義的な枠組みに依拠したものであった。つまり、異なる文化に属する人々は異なるしかたで世界を認識するのであり、人々は各文化に固有の象徴や言語の体系を通じて解釈され意味づけられた世界を自らの現実として生きているのだ、という考え方である。

相対主義をめぐる種々の論争をはじめ、こうした考え方の是非にかんして人類学者は様々な議論を繰り広げてきた。だが、文化主義的な観念は学問的な立場である以上に、日常的な常識に深く根ざしたものである。例えば、雷が鳴るという現象に対する二つの言明を考えてみよう。一つ目は「電気を帯びた雲と雲（あるいは地表）との間に放電が生じた」というものであり、二つ目は「雲の上で神様が怒っている」というものだ。我々はこの二つの言明を全く異なる種類のものとする。

前者は、客観的に実在する自然の事実を反映した言明であり、誤っていたとしてもその真偽は科学

的に決定できると考える。後者については、この言明を発する人が雷鳴という現象をその人なりに意味づけたものであり、その言明の妥当性は個々人の心性に即した主観的な意味づけに委ねられていると考える。そして、ある集団が同様の言明をしばしば発する時には「彼らは雷が人間に対する神の働きかけ（＝「神鳴り」）であると信じているのだ」と説明される。こうした常識的な理解を定式化すれば、ただちに特定の集団と信念をセットにして「文化」という概念で括る学問的立場が導かれる。

このように、文化主義的な枠組みは実際には二つの認識論の結合から成り立っている。第一に<世界／科学的言明>というセットからなる科学的な認識論があり、後者は前者を忠実に反映したものであるとされ（世界→言語）、その根拠は後者の合理性や普遍性に置かれる。第二に<世界／文化的言明>というセットからなる文化的な認識論があり、前者は後者を通じて意味づけられ解釈されるものとされ（世界←言語）、その根拠は後者を支える集合的な心性や慣習に求められる。

その結果、世界内の事物は文化によってコード化された意味を運ぶ容器として文化的現象を構成すると説明されることになる。一見対立的に見える二つの認識論が結合することで、科学的には「同じ」ものである事物が文化によって「異なる」仕方で認識される、という文化主義的な枠組みが成立する。

以上で述べてきたような文化主義的な考え方は、しかしながら、近年その有効性を失いつつある。例えば、科学技術が様々な地域に浸透していくにつれて、「自然」を改変する諸技術が人々の生き

る現実を変容させていく動きが無視できなくなってきた。あるいは、経済／政治のグローバル化を通じて様々な地域の活動が結びつき干渉しあうにつれて、個々の文化という自律的な領域を設定することが妥当性を失っていく。同時に、文化は現実の背後に見出される審級というよりも、脱文脈的な基準が流通するなかで客体化され操作され交渉される対象としての存在感を増しつつある。ただし、周知の通りグローバル化は単なる均質化を意味するわけではない。現代的なフィールドワーク調査の現場においても、いまだ調査者は「ここでは異なる現実が生きられている」という実感を強くもつ。だが、その実感を一般的に説明する上で文化主義的な認識論はもはや有効に機能しない。

本章では、従来の文化主義的な枠組みが失効しつつある現在において、冒頭に掲げた問いに答える人類学的認識論とはいかなるものでありうるかを、ブルーノ・ラトゥールとアルフレッド・ジェルという二人の人類学者の議論を検討することを通じて探求していく。ラトゥールは科学的営為をめぐる前述した科学的な認識論と根本的に異なる議論を展開し、ジェルは文化的営為をめぐる前述した文化的な認識論と根本的に異なる議論を展開している。その対象こそ大きく異なるものの、彼らの方法論は基本的な部分でいくつかの共通点をもっている。第一に、両者はともに「個々の存在者の働きや性質は他の存在者との関係を通じて生み出される」という関係論的な存在論を基盤にしている。第二に、関係論的な存在論が「ある存在者の働きや性質は他の存在者の働きや性質を表す記号として働く」ことを含意することから、人間／非・人間を問わずあらゆる存在者は物質

であると同時に記号ともなる存在として把握される。第三に、以上の考え方にに基づき、存在者が織りなす物質＝記号のネットワークの動態を通じて人々にとって自明な現実認識が生み出されることが描き出される。両者の議論の類似性は、科学的営為と文化的営為を対極に位置づける従来の認識論とは異なり、二つの営為が本質的に異なるものではなく、連続的な地平において把握できることを示している。

以下、二節では科学的知識が生産される場における「循環する指示」をめぐるラトゥールの議論を検討し、三節では文化的実践が生成する場における「エージェンシーの連鎖」をめぐるジェルの議論を検討する。四節では、両者の議論にもとづきながら科学的営為と文化的営為を連続的に捉える視角を形成し、その人類学的認識論としての射程を示すとともに、こうした視角が本論集の主題である「現実批判」という契機といかにむすびつきうるかを考察する。

二、循環する指示、存在への試行

ラトゥールがミッシェル・カロンのと共に推進してきたアクターネットワーク論 (ANT: Actor-Network Theory) は、「あらゆる存在者は関係を通じて生み出される」(Law 1999: 3-4)という関係論的な存在論を基盤にしている。関係に先立つ存在はなく、個々の存在者は他の存在者との関係を通じて特定の形態や性質をもつ。この原則は人間だけでなく動物や機械や道具などの非・人間も含むあらゆる存在に適用される。差異を生み出すことによって他の事物の状態に変化を与えること

ができるもの(Latour 2005: 71)はすべて「アクター」と呼ばれ(1)、これらのアクターが結び
ぶ諸関係が「ネットワーク」と呼ばれる。ネットワークはその働きを通じてアクターを定義し変化
させ、アクターは互いに働きかけながら様々な関係の網の目=ネットワークを構成していく。「ア
クターネットワーク」とは、この両者を同時に表す概念である(Callon 1987: 92-93)。

以上のモデルにおいて、個々の存在者(アクター)は原理的に不安定で流動的なものだが、諸関
係(ネットワーク)が相対的に安定して一定の持続性を持つに至ると、それらの形態や性質は確定
的なものとなり「ブラックボックス」化される。ネットワークの安定化を通じて特定の現実が作り
あげられていく過程を描き出すのがANTの特徴であり、それは主にテクノロジーと社会的関係が
密接に絡み合うような事例を分析する方法論として効力を発揮してきた(Callon 1986, 1987,
Akrich 1992 など)。だが、ANTには科学論としての側面、より正確にはプラグマティックな科
学哲学(批判)としての側面もある。この側面を主に担うのがラトゥールの研究である。彼は関係
論的な存在論をもとに科学的実践を分析し、従来の認識論とは異なる視角を提示している。以下で
は、ラトゥールによる二つの事例分析をとりあげてその内実を検討したい。

第一の事例は、アマゾンの森林に関する調査研究である(ラトゥール 二〇〇七、三三-一〇〇
)。現地の植物学者とフランス人の土壌学者を中心とするこの調査は、森林とサヴァンナが接する
境界地帯で森林がサヴァンナに向けて前進しているのか、あるいはサヴァンナが森林にむけて前進
しているのかを解明するために行われた。この調査旅行にラトゥールは同行し、現地調査が報告書

に結実するまでの過程を詳細に分析する。いかにして世界（アマゾンにおける森林－サヴァンナの遷移）を言葉（森林－サヴァンナの遷移をめぐる報告書の記述）に詰め込むことができるのか、これがラトゥールの問いである。そして彼がアマゾンで見出すのは、自然の事実を知るために入念に自然に手を加えていく科学者たちの姿である。

ラトゥールの詳細な記述のうち、ここでは土壌学者たちの活動に絞って追跡しよう。彼らはまず、生い茂る森林に溶け込みながら測量を開始し、標本となる土壌を取り出す穴を掘る位置を印づける。次に「ペドフィル」と呼ばれる道具（糸を吐き出し、その長さを測る装置）を用いて無数の糸で地表を覆い、それぞれの穴の距離を測る。これらの数値がノートに記された結果、土壌はその各部が座標によって把握される一つの幾何学的な空間へと変換される。

次に土壌学者たちは、各所に掘られた穴からドリルを用いて円筒形の土壌サンプルを採取し、土壌比較器と呼ばれる装置によって分析する。これはボール紙の小さな立方体の容器を縦横十×十個分収納できるスーツケース型の箱であり、様々な穴の様々な深さから採取された土塊が立方体の一つ一つに収められていく。こうして土壌は、幾何学的に配列され、容易に比較可能・入れ替え可能・移送可能な土塊の配列へと変換される。

一連の作業が終わって近所のレストランに戻った土壌学者は、方眼紙を片手に机の上にならべた土壌比較器を観察する。方眼紙上には森林とサヴァンナが接する土壌の横断面図が描かれ、特定の座標の深さによる色の差異がまとめられた図表が完成する。このとき、土壌は容易に移送可能で複

写可能な一枚の方眼紙上の図表へと変換されている。比較器を精査し図表を描く過程を通じて、調査者たちは「砂状のサバンナと粘土状の森林のあいだで、サバンナ側の境界に沿って帯状の土地が伸びており、その土地はサバンナよりも粘土状であり、森林ほど粘土状ではない」こと、つまり森林に適した土壌がサバンナに向かって前進していることを見出した。以上の観察結果は清書された図表とそれを説明する文章によって報告書に盛り込まれる。いまや土壌は報告書にまで変換された。ついに世界が言葉に詰め込まれたのである。

さて、以上でみてきた記述を通じてラトゥールは何をしようとしているのだろうか。それはまず、世界と「対応」する言明こそが真であるという従来のモデルが科学者の具体的な実践に対していかに的外れかを示すことである。このモデルでは世界と言語の間にはまず断絶が存在し、言明による対象の「指示」は両者を分かつ断絶を飛び越えて言語が世界に一致することを意味する。だが、アマゾンに赴いた科学者達が行っていたのは、世界を虚心坦懐に観察してそれと一致する言葉を探すことではない。彼らの活動を通じて、①土壌は、②ペドフィル等によって区画化された幾何学的大地→③土壌比較器に収められた土塊の配列→④図表（土壌の断面図）→⑤報告書の文章という一連の変換をうける。同時に、この変換は常に逆方向にもなされうるように維持される。報告書の文章は、これらの変換の跡を逆にたどってもとの土壌へと戻りうるものでなければならず、これらの結びつきがどこかで——ペドフィルの糸がもつれてカウンターが誤作動したり、比較器のボール紙が破れて土塊が混じったりして——断たれば、その妥当性は失われる。

土壌から報告書に至る各段階は後続する段階によって示される事物であり、先行する段階を示す記号となっている。換言すれば、①から⑤のアクターは物質かつ記号として互いに働きあう。言語から世界へ指示が一方向的に示されるのではなく、諸アクター間を指示が循環しているのだ。このとき、各アクターは固有の形式（形相）と物質性（質料）を持つが、それらの性質は常に他のアクターとの関係に規定される。例えば、土壌比較器の配列（③）は、ボール紙や木製の枠といったその物質性において区画化された大地（②）の形式を受け取り、それによって升目状の配列という自らに固有の形式を実現する。その形式は、さらに方眼紙と鉛筆の線からなる物質性をもった図表（④）に引き受けられることで、土壌の断面図という新たな形式へと変換される（ラトゥール 二〇〇七、八八―九五）。このように、各アクターの形式と物質性は他のアクターとの関係を通じて生み出され、それらが入念に調整されることで一連の変換、「循環する指示」が実現される。「個々の言語体系に応じて経験世界が分節化される」というソシュール派の定式とは異なり、言語が世界を分節化する以前に、世界には様々な分節化の連鎖が生じている。ペドフィルの吐き出す糸は大地に縛り付けられることでそれを分節化し、分節化＝区画化された大地は土壌比較器によってさらなる分節化をうけ、新たな形で把握され表現されるようになる。報告書の文章が世界について何かを言明しうるのは、自らに固有の形式と物質性においてこうした分節化の連鎖に連なる限りにおいてである（2）。

このように、科学的な認識が可能になるためには「言葉よりも世界自身をはるかに強く攪拌し、

変換する」ことが要求される（ラトゥール 二〇〇七、六三）。科学者たちが自然の「实在」を正確に把握するためには世界を特定のしかたで「制作」しなければならず、世界を「制作」するからこそ彼らは「实在」を把握することができる。しかし、この主張は一見して矛盾したものと感じられるだろう。「实在」とは人為的に作られたものの外部にあり、作られているということはそれが自然のものではないことを意味する、というのが伝統的で常識的な見解だからだ。

この矛盾は上で検討した事例においてはあまり顕在化しない。この事例では、土壌そのものは科学者達の活動を通じて様々な変換を受け言説の領域に持ち込まれるのを待ちながら常にそこに存在していたかのように見えるからだ。「制作」と「实在」のあいだの矛盾は、科学者が新たに何かを発見するという局面でより強く現れる。こうした局面をめぐるラトゥールの分析を次にみていこう。

第二の事例は、パストゥールによる乳酸発酵素（乳酸発酵を担う酵母）の発見である。ラトゥールは、パストゥールの論文「いわゆる乳酸発酵に関する報告」を分析し、乳酸発酵素という新たなアクターが現れていく軌跡を、以下のように描き出していく（ラトゥール 二〇〇七、一四六-一八四）。

論文の冒頭で、この新たな実体の存在は否定されている（段階1）。「現在に至るまで、綿密な研究でも有機的存在の発生を発見することは不可能なままである。そのような存在を識別した観察者も、同時にそれらは偶然の産物であり、発酵過程を駄目にしていないと確証した」とパストゥールは述べる

次に、注意深く観察すればそのような存在=アクターXが感覚されることが示される（段階2））。乳酸発酵には「派灰色の実体の点々」が伴う。その灰色の物質は圧縮乾燥された通常の酵母と全く同じように見え、わずかに粘りがある。この段階ではアクターXは、「見え」や「粘り」といった移ろいやすい感覚所与（=観察者というアクターへのわずかな働きかけ）の集合にすぎない。

次にパストゥールは、実験室の様々な要素を動員し、アクターXがそれらに「何をなしうるか」を見定めていく（段階3）。それは液体にまかれ、発酵の引き金をひき、液体を濁らせ、白亜を消失させ、沈澱を形成し、気体や結晶を生じさせ、粘性をもつ。このとき、アクターXは感覚所与の集合体から、これらの振る舞いの集合体、これらの「行為の名前（a name of action）」へと変化している。

だが、アクターXは行為の名前ではあってもいまだ行為の源泉ではない。ここでパストゥールは、この実体を醸造酵母と比較し、分類学において名前と位置を有するような有機的存在へと変える（段階4）。醸造酵母に見出される一般的特徴のすべてがXに見出されること、また、同じ液体に醸造酵母とXをまくと異なる結果（アルコール発酵と乳酸発酵）が得られることから、Xが自然分類において醸造酵母に隣接する属に位置する構造をもつことが導かれる。

分類学上に位置を占めるに至ったX、すなわち「乳酸発酵素」（lactic acid ferment）はいまや確立した実体である。あらゆる作用の起源は酵母へと移行し、それを中心に従来の実践が再定義される（段階5）。すなわち、生き物としての発酵素の存在を前提にして発酵現象一般に当てはまる

条件（酵母の純粋性、各酵母の性質に適合した養分の存在、溶液の化学的組成等）が特定される。

こうして、アクターXは識別不可能な存在（段階1）から発酵をめぐる諸作用の起源（段階5）まで、その姿を変化させてきた。この過程は、新たなアクター（乳酸発酵素）の働きが他の諸アクターをいかに変化させうるのかを明らかにする一連の「試行」（Trial）を経て、そのアクターがネットワークの一員となる＝実在するようになる過程に他ならない。ラトゥールによれば、パストゥールは同時に三つの試行に従事している。第一に、上記の論文を通じて酵母が発酵の単なる副産物ではなくその主要因であるという言説を流通させること、第二に、実験室の様々な非言語的要素を動員して発酵酵母が適切で豊かなパフォーマンスを行う状況を作りだすこと、第三に、アカデミーの同僚たちの検証によって第一の言説と第二の状況の間に必然的な結びつきがあることが明らかにされることである。最後の試行が成功すると、第一の言説はパストゥールの作り話ではなくなり、その背後に実在が確かに存在するようになる。パストゥールは発酵酵母が生き物であることを証明し、それは醸造酵母とは異なる特定の発酵の引き金をひく実体となる（段階6）。

では、以上でみてきた一連の過程において、酵母そのものがパストゥールによって制作されたのだろうか、それとも酵母はパストゥールの活動から自律して存在するのだろうか。ラトゥールはこの問いを二者択一式に捉えることを否定する。酵母はパストゥールによって制作され、だからこそ、それはパストゥールの活動から自律した存在として現れる。この一見して突飛な主張を押しだすにあたって、ラトゥールは「命題（proposition）」と「分節化（articulation）」という新たな用語

を導入し、以下のように述べる。「パストゥールがより多くの作業を行うほど、乳酸発酵素はより独立するようになる。というのも、いまや実験室の人工的設定のおかげで、発酵素そのものとは決して類似していない命題が極めて多数分節化されるからである。乳酸発酵素は、いまや、非常に多数の能動的かつ人工的な状況の中で、他の非常に多数の実体の中で分節化されているのであるから、分離した実体として存在している」（ラトゥール 二〇〇七、一八四-一八五）。

「命題」という概念はその修辭的な効果を別にすれば「アクター」とほぼ同義であると考えられる（3）。また、「分節化」とは、第一の事例で触れたように、各アクターが自らの性質や振る舞いを通じて他のアクターを把握し表現しあう働きを指す。したがって、上記のラトゥールの論述は次のように理解することができるだろう。前述した1から6の過程においてパストゥールというアクターがまず行っているのは、（A）アクターXの周囲に様々なアクターを配置し、それらがこうむる変化を特定していくことでXの存在を際立たせることである。この段階では、Xの有様は他のアクターとの関係に大きく依存している。パストゥールが後者を組織することを通じて前者の性質や働きが形成されていくのであるから、確かに彼はアクターX=乳酸発酵素を「制作」している。

だが、彼の活動を通じてXが他のアクターと密接に関係づけられていくことは、（B）他のアクターの有様が乳酸発酵素との関係に次第に依存するようになっていくことでもある。発酵をめぐる多くの要素（培地の性質、溶液の科学的組成、生化学、チーズの製造法など）が乳酸発酵素の存在をあてにして定義され機能するようになる。パストゥールもまた、「乳酸発酵素の発見者」として

の自らの地位や名声を、発酵素の働きに大きく依存する。この段階に至れば、あるアクターがいか
に逸脱的に振る舞おうと乳酸発酵素の有様を大きく変えることはなく、逆に発酵素を軸に形成され
てきた諸関係に適合的なかたちで自らを変えざるをえない。こうして、乳酸発酵素は他のアクター
の働きかけに対して（相対的に）独立した実体、「実在」となる。パストゥールによる制作の過程
(A)と乳酸発酵素が実在していく過程(B)は別個の過程ではなく、連続的で表裏一体をなす。
前者がより入念に行われるほど、後者はより確かなものとなる。このように、関係論的存在論をと
るかぎり、「制作」と「実在」は矛盾せず両立可能である。

以上の見解は「真理」をめぐる伝統的な見解とは多分に異なる。古くから真なる知識の形成と
は、世界の状態についての人々の「信念」と、人為とは無関係に実在する普遍的な「真理」が重な
りあう領域が生み出されることだと考えられてきた。一方、ANTにおいて「真理」が生み出され
る過程とは、諸アクターの相互作用を通じて新たなアクターがネットワークに接続され、その働き
をあてにしながら諸アクターが自らを変化させ定義し直していく運動に他ならない。したがって、
「パストゥールによって発見された乳酸発酵素は本当に存在する」という言明の正しさ（真理値）
は、乳酸発酵素というアクターをあてにして19世紀以来生み出されてきた無数の実践、階層的に
拡大してきたネットワークの働きによって（のみ）正当化され、重みづけされる。ラトウールは言
う。パストゥール化（低温殺菌）されたヨーグルトや牛乳を飲み、構成物質を服用する私（たち）
はパストゥールのネットワークの内側で生きており、「端的に私はパストゥールの微生物を受け継

いでおり、私はこの事象の末裔であり、翻ってこの事象は私が今日なすことに依存している」（ラトゥール 二〇〇七、二一五）。

以上で検討してきたラトゥールの議論に妥当性が認められるのであれば、冒頭で素描した従来の科学的な認識論は大きく修正されることになるだろう。いまや我々の「外側」に存在する自然の实在を科学的言明が忠実に模写するという設定はとれない。文化によって異なるしかたで認識される「同じ」世界など存在しないのである。文化主義の隠れた基盤たる科学的な認識論が拒否されたいま、その影響は文化的な認識論にも及ばざるをえない。我々の「内側」に存在する世界の見え方（＝世界観）を文化的言明が形成するという設定を捨て、「制作」を通じて「实在」が生み出されるという視点が加えられたとき、文化的事象はいかに捉えなおされうるだろうか。この問いを探究するために、次節では「アート・ネクサス」をめぐるアルフレッド・ジェルの議論を検討していきたい。

三、連鎖するエージェンシー、仮設される作用連関

アルフレッド・ジェルの遺作『芸術とエージェンシー』はアートの人類学理論を銘打ってはいるが、その分析は芸術作品に限定されるものではなく、偶像や霊媒やクラの財宝といった様々な文化的事物を対象としている。ジェルは、これらの事物を何らかの意味を運ぶ容器として捉える従来の文化的な認識論に根ざした見解を否定し、それらを人間の行為を媒介する社会的な行為主体^{エージェント}と見な

すことを分析の基礎に据える。その上で彼は、「人と事物の社会的関係や事物を介した人間同士の社会的関係によって、モノが人々と結びつけられていく領域」（Gell 1998: 12）を探究していく。

ジェルジェールの議論は、行為主体性エージェンシーについての関係論的な理解にもとづいている。つまり、ある存在者は、その行為を受け取る受動的な存在者（「パーシエント」）との関係を通じて行為主体（「エージェント」）となる（Gell 1998: 22）。例えば、真夜中に突然故障した自動車は、それによって受動的な立場におかれる運転手（パーシエント）との関係においてエージェントたりうる。反対に、思うまま車を操る時には我々がエージェントであり、その限りにおいて自動車はパーシエントである。関係論的なエージェンシー概念に基づく限り、「エージェントとは意図や心や意識をもつもの＝人間である」という通常の固定的な定義は否定され、人間だけでなく様々な非・人間が他者との関係を通じてエージェンシーを発揮することになる。さらに、この考え方においては「働きかけられる」という（パーシエントの）受動性を通じて「働きかける」という（エージェントの）能動性が生み出される。このため、神々や霊といった必ずしもその存在が明確でない実体も、それに「働きかけられている」と自らを捉える人々に対してエージェンシーを発揮しうる。

エージェントとパーシエントの関係は二者間を超えて入れ子状に拡張する。つまり、A（エージェント）がB（パーシエント）に対して働きかけ、さらにB（エージェント）がC（パーシエント）に働きかけるとき、Bを通じてAがCに働きかけるという事態が生じうる。ジェルによれば、このときBはCに対してAの「エージェンシーのサブダクションを促す指標（インデックス）」

として働く。例えば、再選を狙うサッチャー首相の微笑みを前面に押し出して製作された選挙ポスター (B) は、物理的な存在であると同時にそれが促すアブダクション (仮説的な推論) を通じて彼女の人柄や人々への好意を表す記号 (指標) となり、有権者 (C) を魅了しようとする首相陣営のポスター製作者 (A) の行為を媒介する。あるいは、マリア像に口づけると聖母の力が顕現し病気や貧困が治るという状況では、マリア像という指標 (B) が、それが喚起するアブダクティブな推論を通じて、信者 (C) の苦難を解消しようとする聖母 (A) の行為を媒介する (Gell 1998: 32)。

ジェルの言う指標とは推論を喚起する物理的な存在であり、この物質=記号を媒介にして人間と非・人間の間でエージェンシーが連鎖する。こうした場を彼は「アートネクサス」と呼び、①指標②アーティスト③レシピアント④プロトタイプの四項が織りなす関係の図式によってそれを描きだす (各項の詳細は本論集石井論文を参照)。例えば、第一の事例は[[制作者 (アーティスト) →ポスター (指標)]→有権者 (レシピアント)]、第二の事例は[[聖母マリア (プロトタイプ) →マリア像 (指標)]→信者]といった図式によって表わされる (矢印の左側にエージェント、右側にペーシエントが置かれる)。

以上で素描したジェルの方法論は、言語を軸とした世界に対する人々の認識 (世界観) の付与とつかちで文化を捉える従来の認識論とは異なり、人間と非・人間が互いに物質=記号として働きかけあうことで文化的事象が生まれるという視角を提示するものである。とはいえ、以上の説明

だけでは従来の認識論と何が異なるのかという疑問は避けえないだろう。例えば、「聖母マリアがマリア像を通じて信者に働きかける」という関係性は信者の頭のなかにおいてのみ成立するものであり、ジェルは描く図式とは彼らの世界観を描くものでしかないのでは、という反論が予想される。こうした懐疑を退けるために、以下ではジェルは「アート・ネクサス」論の根幹をなす二つの概念「指標」と「アブダクション」の内実を検討していきたい。

この二つの概念はともに C・S パースの記号論から援用されているが、ジェルはこれらの概念を通常のパース理解(4)を少なからず逸脱するものへと改変している。まず指標について考察しよう。パースは記号をその対象との関係において分類し、類像(アイコン)／指標(インデックス)／象徴(シンボル)という三分法を提示した。類像は対象との類似性によってその記号となり、指標は対象との事実的連結(作用連関)によってその記号となり、象徴はもっぱら精神の働き(心的連合や解釈思想)によって対象の記号となる(パース 1986: 31-56)。つまり、ある要素が指標となるときにはそれが表わす対象との間にあらかじめ作用連関が存在する。火→煙という連関がまず存在し、次に解釈者がこの連関に注目することで煙は火を表す指標となる(米盛 一九八一、一四五)。

これに対して、ジェルは指標概念は以下の二つの点において通常のパース理解とは異なるものとなっている。第一にジェルは、連関があらかじめ存在する事例よりも、人々が自ら連関を作りだすことでモノを記号化していく事例を範例として指標を据える。例えば、古代タヒチのオロ・カルト

の中心をなすトッオと呼ばれる物体は、宇宙の支配者たるオロ神が天空を支えるために用いた柱であるとされる。トッオはそれを直接見ると死んでしまうほどの強い力をもつため、赤い鳥の羽根などで嚴重に包装される。トッオに「縛りつけられる」ことで神の聖なる力を表わす指標となった羽根は、儀礼においてトッオからひきはがされ司祭や首長の間で分配されると、神の聖なる「脱け殻」として俗世における彼らの政治権力を媒介する働きをなす。モノは対象に縛り付け（＝連関させ）られた後に引き剥がされることで対象を表す記号となり、対象の顕現や働きを媒介する。この過程は、前章で論じたペドフィルの糸や比較器が土壤に「縛りつけられる」ことで土壤を表す記号となる過程と同型である。トッオはその質料性においてオロ神の形相を受取り、羽根はその質料性においてトッオの形相を受け取る。一連の変換を通じて神なる「実在」が「制作」され、その働きがネットワークの内側へと組み込まれる。ジェルによれば、こうした過程は宗教的な人工物一般に見られる。人々は偶像や聖堂などの指標を通じて神のエージェンシーを「畏にかけ」、その力を世界の内側へと導き入れる（＝アブダクトする）のである（Gell 1998: 113-114）。

第二に、ジェルにとって指標とはなによりも「アブダクションを喚起するもの」である。アブダクションとは演繹と帰納に加えてパースが提示した第三の推論形式であり、その基本的な形式は次のように表される。「①意外な事実 C が観察された。②しかし、もし H が真であれば、C は当然の帰結だろう。③よって、H が真であると考えべき理由がある」（米盛二〇〇七、六〇）。ジェルは、この定式の C の部分に指標を位置づけ、H の部分に指標が喚起する存在を位置づけてい

ると考えられる。これによって彼が「指標が促すアブダクティブな推論」と呼ぶものが構成される。

その最良の例としてジェルが挙げるのが、「笑顔が好意を表わす」という事態である (Gell 1998

: 15)。この時、「笑顔」(C)から「好意」(H)が推論され、CはHの帰結とされる。推論

を通じて $H \rightarrow C$ という作用連関が仮に設定され、その限りにおいてCはHの指標となる。こ

の連関はあくまで仮設であるから予め存在する必要はない。指標とアブダクションの接合はまた、

マリア像のような通常アイコンやシンボルとして分類される記号を指標として扱うことを可能にして

いる。

さらに、「アブダクション」という概念もパース本来のものとは異なる位置づけがなされている。

パースにとってアブダクションとは演繹→帰納という経路を通して科学的に検証されるべき仮説

の形成に他ならない (伊藤 一九八五、一七四)。対して、ジェルのアブダクションは、検証によ

って確定される仮説形成に限定されない。例えば、「笑顔が好意的な態度を表わす」という仮説に

は容易に反証 (笑顔の裏に悪意が潜む) が見つかる。だが、こうした仮説は、それが事実であるこ

とを検証することはできなくとも、それが事実となるように実践を方向づけることは可能である (

5)。実際、上記の仮説は、人々が虚偽の笑顔を浮かべないように心掛ける (好意的な感情に笑顔を

「縛り付ける」) ことで妥当性を高めていく。また、指標が喚起するアブダクションの特徴は、存

在者のネットワーク (アート・ネクサス) に「部分—全体」関係を設定することにある (Gell

1998: 104)。前述した選挙ポスターの例においては、ポスターという部分がサッチャーの政治的

エージェンシーという全体に位置づけられる。この推論が反復される限り、ポスターへのいかなる介入も政治的な含意をおびる。例えばポスターを切り裂く反サッチャー主義者の行為は、ポスターを通じて「非難されるサッチャー」というプロトタイプを流通させ、有権者に働きかける。たとえ反サッチャー主義者など存在せず、暴風雨がポスターを破っただけだとしても、サッチャーの政治的エージェンシーは打撃を受けうる。仮設された作用連関が実践を通じて具体化するとき、他の想定されうる関係性（Ex. 暴風雨→破れたポスター）は後景に退く。ジェル（Gell）の議論から一歩踏み出して言えば、無限に想定可能な関係性を有限の範囲に切り詰めるアブダクションは、個々人の認知的な力能である以上に、人間と非・人間が織りなす集合的な実践の場（アート・ネクサス）に備わる力能であると考えられる。

以上でみてきたように＜指標がエージェンシーのアブダクションを促す＞プロセスは次の三つの契機によって構成されることが考えられる。（A）指標がアブダクションを促し、（B）アブダクションを通じて作用連関が仮設され（C）仮設された作用連関が指標をめぐる実践を方向づけ、実践を通じて具体化される。例えば、クラ交換では、クラの操作者のエージェンシーが彼の名前をもつクラの財宝（Kula valuable）に置き換えられ、島々へと拡張していく（Gell 1998: 230）。そこでは、ある人物の名を持つクラの財宝（指標）の流通の度合いから、その人物の内側にある意志や操作の力能がアブダクティブに推論される。＜操作者の持つ力→彼の名を持つ財宝の流通＞という作用連関が仮設され、この仮設された作用連関がクラの財宝をめぐる実践を方向づける。人々は

自らの偉大さを証明しようと綿密な戦術のもとに財宝を島々に流通させ、同時に、クラの財宝間の序列に従って操作者の序列が決定される。こうした実践がまた、クラの財宝から操作者の力を推論することの妥当性を強化する。このように上記のプロセスは実際には $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow \dots$ という循環をなす。認識の仮設（推論）をあてにして実践が組織されると同時に実践をあてにして認識が妥当なものとなる。両者が互いに互いの根拠となる作用が累積的に働くことでそれらは確固たるものとなり、人々にとって自明な現実が作りあげられていく。このように、ジェルの言うアート、あるいは文化的事象とは、物理的な世界の上に投射された意味の体系ではなく、「世界を変えることを意図した行為の体系」なのである（Gell 1998: 6）。

本章冒頭で述べた問いに戻って考えれば、以上の議論が示しているのは、＜『異なる文化に属する』とされてきた人々は、様々な非・人間との相互作用を通じて世界（物質＝記号のネットワーク）を我々とは異なる仕方で作りあげているからこそ、我々とは異なる仕方で世界を認識するのだ＞という考え方である。世界（物質＝記号のネットワーク）を特定の仕方で制作することは同時に世界に対する特定の認識を制作することである。したがって、「彼ら」は、同一の世界を「我々」とは異なる仕方で認識するのではなく、「我々」とはどこかしら異なる仕方で世界を作り上げているからこそ、「我々」にとって異質な現実を自明なものとして生きるのである。

四 ネットワークの果て

以上で検討してきたように、科学的営為をめぐるラトゥールの議論と文化的営為をめぐるジェルの議論は、世界を存在者の織りなす関係の動態として把握した上で、世界を作りあげる営為がそのまま世界を認識する営為に他ならないことを示す、という点で基本的に同一の視角を提示している。我々は世界を特定の仕方で作るからこそ世界を特定の仕方の意味づけるのであり、世界を特定の仕方の意味づけるからこそ世界を特定の仕方で作る。そして、こうした実践の只中において、世界（物質＝記号のネットワーク）そのものが自らに対する認識を産出する。しばしば対極におかれてきた科学と文化は、「世界を制作＝認識する」営為である点で本質的に異なるものではない。

ラトゥールとジェルは、マリリン・ストラザーンやロイ・ワグナーとならんで、人類学における「認識論から存在論へ」の転回を推進してきた論者とされることがある（Henare & Holbraad & Wastell 2007: 7-8）。対して本章で強調したいのは、彼らの議論が単に認識論から存在論へ焦点を移動させたものではなく、むしろ、関係論的な存在論を基盤にして人類学的な認識論を刷新する含意をもつことである。存在者を存在せしめる装置として「関係」を措定することによって、各存在者は自らの振る舞いを通じて他の存在者を表現するものとなり、こうした物質＝記号のネットワークがその動態を通じて自らに対する認識を産出する。こうして存在論が認識論へと再び接合される。だが、この接合は一つの困難を孕んでいる。というのも、各存在者の形態や性質が他の存在者との関係を通じて生み出されるのであれば、そうした関係の全体が——暫定的にはあっても——画

定されない限り各存在者の形態や性質は安定しえない。可能な関係性が常に無限に想定されうるのなら、各存在者は純粋な関係の戯れのなかに埋没して自らの姿を絶えず変え続けることになり、ここには安定した現実認識が生じる余地がない。存在者のネットワークが有効に作動するためには、それは自らを「切断する」働きを持たなければならない (Strathern 1996: 522-523)。ジョン・ロウが指摘するように、存在者 (アクター) のネットワークという発想は、ソシュールが定式化した「言語体系において、個々の要素 (言語記号) は他の要素との関係を通じて生み出される」という関係論的な記号論を、言語だけでなくあらゆる存在に適用したものと言える (Law 1999: 3)。だが、ここには単なる適用対象の拡張以上の含意がある。というのも、関係論的記号論が言語体系 (ラング) という仮定のもとに対象となる要素を有限の範囲に限定しうるものであったのに対して、ネットワークを構成する異種混交的な諸要素をあらかじめ限定しうる条件は存在しない。ある存在者が他の存在者と取り持つ関係 (= ネットワーク) は潜在的には常に無限の可能性に開かれている。だが、ストラザーンが指摘するように、それが具体的な状況に対する分析モデルとして機能するためには、存在者として数え上げられるものが有限の範囲に縮減されなければならない。したがって、存在者のネットワークという観念、あるいは関係論的存在論には、潜在的な無限性と現実的な有限性が接続される契機、すなわち全体の暫定的な画定という契機が含まれることになる。

ジェルの議論においては、アブダクションを通じて「部分—全体」関係が仮設される。偶像等の指標は世界の果てたる神々や霊に縛り付けられることでそれらのエージェンシーを世界の内側へと

導き入れ、この世界を作りかえていく運動の端緒となる。より正確には、こうした運動を通じて世界の内側と外側をわかち境界自体が暫定的に画定（仮設）される。一方、ラトールが「試行」という概念によって論じるのは、乳酸発酵素のような新たなアクターがネットワークの一部となることを通じてネットワークの全体が再画定されいく過程に他ならない。この意味で、土壌学者やパストールもまた「自然の实在」に計測装置や実験器具を縛り付け、そのエージェンシーを世界の内部に組み込むことで世界を作り変えていく運動に参加している。いわば科学的営為は「实在」を畏にかける仕掛けであり、それは「神」を畏にかける宗教的営為とかわらず、潜在的な無限を現実的な有限にたたみこむことで世界を作りかえる力能をもつ。無限と有限が交わる臨界点、世界＝ネットワークの果てが実践を通じてその度ごと仮設される。このように、「世界を制作＝認識する」とは単にあらかじめ存在する世界内の事物を組み替えることではなく、世界それ自体の境界を内側から揺るがしながらこの世界を再編成していく営為なのである。

以上で論じてきた視角において「現実批判」という契機はいかに見出されうるだろうか。まずもって批判とはその時々具体的な状況に即して「世界が変わりうる」ということを示す行為であろう。これまで人文・社会科学における「批判」の多くは、序章で論じた科学的／文化的な認識論に基づいたものであった。つまり、多くの人々にとって自明な現実認識を、科学的に「正しい」現実認識を対置させることで批判する（マルクス主義等）か、特定の人々（とりわけ「弱者」）の視点からみた現実認識を対置させることで批判する（カルチュラル・スタディーズ等）というのが典型

的な語り口であった。いずれにしても、現実の外部にその是非を判定しうる何らかの基準を打ち立てることが世界の可変性を示すことを可能にしていたと言えよう。

これに対して、ラトゥールやジェルの議論には現実の外部にたつてそれを認識し判断する審級が存在しない。両者はともに、様々な存在者の関係を通じてこの世界の現実が作りあげられていく過程に分析を集中させる。その分析は一見して現状の追認にしか思えないかもしれない。クラ交換について論じたように、実践を通じて観念が「真理化」（ジェイムズ 一九〇七=二〇一〇、二〇〇）されていく過程はしばしば累積的で不可逆的なものとなり、実践を通じてその前提を覆すことは容易なことではない。だが、本節で強調してきたように、彼らの議論には、世界の内部における存在者たちの相互作用を通じて、世界それ自体の境界が更新されるという契機が含まれている。この点で、文化的実践も科学的実践も等しく世界の可変性を喚起する批判的営為となりうる。

いずれにせよ、自明とされる現実認識に何らかの「正しい」基準や何らかの「マイナー」な視点に基づく現実認識を対置させ、後者によって前者の虚偽性を糾弾するという従来の批判の文法が有効に機能しえなくなった現在、これまで以上の論理的な厳密さと倫理的な切実さをもって「世界が（真に）変わりうる」ことを描き出すことが我々には必要とされている。本章では、そのための足がかりの一つとなりうる基本的な視角を提示することを試みた。その精緻化は今後の課題としたい。

<注>

(1) ANTでは「アクタント」(actant)という分析概念も使用されるが、主に二つの用法が混在しているため本稿では人間／非・人間に関わらず行為を遂行するものを「アクター」と記す。二つの用法とは、第一に人間の行為者を「アクター」と呼び、非・人間の行為者をアクタントと呼ぶ用法(ラトゥール二〇〇七、三九五)であり、第二に他のアクターとの関係においてその存在が明確に確認され定義される以前のアクターを「アクタント」と呼び、既に定義されたものを「アクター」と呼ぶ用法(Latour 2005: 71)である。

(2) こうした視点は、ソシユール派の「恣意性」の原理に抗して、人々の身体的な実践が経験世界を組織する仕方が言語に反映すると論じてきた認知意味論の議論(Cf: レイコフ&ジョンソン 1989、レイコフ 1993)ともある程度まで親和的なものであろう。

(3) ラトゥールはホワイトヘッドを援用しながら「命題(proposition)」を「異なった実体が接触を取るために与えられた機会」として定義している(ラトゥール 二〇〇七、一八一)。だが、その内実は曖昧であり、むしろ「命題」を「分節化／言明(articulate)する」という、言語的な表現を非言語的な領域にズラしていくレトリック上の効果をえるために使用されている言葉であると考えられる。本章では、ラトゥールが「命題は何よりもアクタントである」と述べており、ANTにおいてはアクタントとアクターの間には本質的な差異はないことから、アクターとほぼ同義の概念として扱う。

(4) パースの記号学ならびにアブダクションの論理学は、第一次性／第二次性／第三次性という

概念を中核とする独自の特異なカテゴリー論に貫かれており、その精緻かつ錯綜した理論全体を把握することは本稿では不可能である。そのため、本稿でパースの議論として示すものはあくまで現在のパース研究において一般的に理解されている限りでの概念規定に従っている。

(5) ただし、ジェルの議論自体において実践という契機が焦点化されているわけではない。ここでの議論は、あくまでジェルの議論に対する可能かつ妥当な解釈の一つとして提示するものである。

<参考文献>

Akrich, M. 1992 “the De-Description of Technical Objects,” in W. Bijker and J. Low(eds.) *Shaping Technology / building society*, MIT press, pp. 205-224.

Callon, M.

1986 “Some Element of Sciology of Translation : Domestication of the Scallops and the Fisherman of St Brieuc Bay,” in John Low(ed.) *Power.action,and Belief : A new Sciology of Knowledge?*, Routledge & Kegan Paul, pp. 196-233.

1987 “Society in the Making: The study of Technology as a Tool for Sociological Analysis,” in W. Bijker, T.P. Hughes and T. J. PINCH (eds.) *The Social Construction of Technological Systems: New Directions in the Sociology and History of Technology*,

MIT Press, pp. 83-103.

Gell, A. 1998 *Art and Agency : an anthropological theory* Clarendon Pr.

Henare, A, M. Holbraad and S. Wastell (eds.) 2007 *Thinking Through Things: theorizing artefacts ethnographically*, Routledge.

Latour, B. 2005 *Reassembling the social An introduction to Actor-Network-Theory*,
Oxford university press.

Law, J. 1999 “After ANT: complexity, naming and topology” in J. Law and J. Hassard (eds.)

Actor Network Theory and after, Blackwell and the Sociological Review, pp.1-14.

Strahern, M. 1996 Cutting The Network, *Journal of Royal Anthropological Inst* (NS)2: 517-35.

伊藤邦武 一九八五 『パースのプラグマティズム：可謬主義的知識論の展開』 勁草書房。

ジェイムズ、W 二〇一〇『プラグマティズム』（榊田啓三郎訳）岩波書店（原著一九〇七）

パース、C.S 一九八六 『パース著作集2』（内田種臣訳） 勁草書房。

米盛裕二

一九八一 『パースの記号学』 勁草書房。

二〇〇七 『アブダクション——仮説と発見の論理』 勁草書房。

ラトゥール、B

二〇〇七『科学論の実在——パンドラの希望』（川崎勝・平川秀幸訳） 産業図書。

レイコフ、G 一九九三 『認知意味論』 (池上嘉彦ほか訳) 紀伊国屋書店。

レイコフ、G. 、 M. ジョンソン 一九八九 『レトリックと人生』 (渡部昇一ほか訳) 大修館書店。